

百歳を迎える 母のこと



旭川市医師会
北彩都病院

ふく ほん たかし
福 原 敬

私は、昭和28年4月27日、母が28歳の時に生まれた4人兄弟の末っ子です。生まれたのは島根県出雲市ですが、なんと生後2か月で汽車に揺られて東京に転居しました。戦後色がまだ濃い時代、赤ん坊にとっては過酷な引っ越しだったに違いありません。着いた先は、東京都足立区宮城町という隅田川と荒川に挟まれた三角州のような下町の工場地帯で、父が済生会宮城診療所の医師として赴任したため、ということなのでした（写真）。辺りは、トタン屋根の下地に敷くルーフィングと呼ばれる防水布を作る町工場が並んでおり、絶えず黒煙が立ち込めているような劣悪な環境でした。田舎に比べ食糧事情も悪く、案の定、母は肋膜炎を患い母乳が出なくなり、以後私はドライミルクで育てられました。有名な森永ひ素ミルク中毒事件は昭和30年なので、数年の差で難を免れています。近くの風呂屋に行くのですが、油まみれの工具さんたちが入ったあとの遅い時間は湯が濁っていて、とても入れなかったと母から聞かされました。診療所の隣に保育園がありその先が堤防に繋がっていたこと、兄と近所の悪ガキが診療所の裏で、マッチを擦って火遊びをしていたことなどのおぼろげな記憶しかありません。

昭和32年春には父の診療所開業で練馬区に転居しました。当時の練馬はいかにも武蔵野という感じの郊外の町で、練馬大根の畑がたくさんあり、冬には野原の向こうに雪を被った富士山がくっきりみえるような土地でした。診療所は看護師も雇わず父一人でやっていたので、母は7人家族の家事と診療所の手伝いで超多忙だったと思います。私は早熟な子供だったようで、字を覚えるのも兄よりも早く、小学校ではガキ大将でした。やがて中学受験を目指して進学教室に通うようになり、日曜日には渋谷の教室に模擬試験を受けに行くようになりました。時々母がついてきましたが、実は帰りに渋谷東急の屋上にあったプラネタリウムで昼寝するのが楽しかったと、最近になって打ち明けられました。

時は経ち平成7年に父が亡くなり、その後、母は横浜の高齢者住宅で暮らしていましたが、あるとき末っ子の私のところに世話になるよとあって、旭川に転居してきました。元来気が強く、頑固な人でしたが、そんな性格があったからその後もマンションで独居を続けてこられたのだと思います。しかし子供の言うことには耳を貸さないの、世話をする私たち夫婦にとってはとても難しい存在でもありまし

た。90歳の時大腿骨骨折した時に、部屋がごみ屋敷に近くなっていたのを見かねて、入院中に室内を清掃、整理したところ逆鱗に触れ、以来しこりが残りました。97歳の冬には脳梗塞を発症し、さすがに独居を続けることはできないと判断し、翌春退院と同時に介護付き高齢者施設に入居となりました。当初現状の受け入れに難儀していましたが、99歳を超えた最近では、他人の世話にならねば生活できない赤ん坊帰りの運命を受け入れるようになりました。

そんなある日、内閣総理大臣と旭川市長から令和6年度の百歳の表彰があるという報せが届きました。美容院に行き体裁を整えて、敬老週間に市役所の職員の訪問を受け、表彰状と記念品を受け取りご機嫌でした。母は大正14年の早生まれなので、満百歳は今年の3月ですが、頭も比較的しっかりしており健康状態は落ち着いているので無事迎えられるのではないかと考えています。因みに表彰状を下された内閣総理大臣岸田文雄氏は私の高校の後輩であり、なにやら縁を感じた次第でした。



足立区宮城診療所前での家族写真
母が私を抱えています